

検査情報月報



横浜市衛生研究所

平成 22 年 10 月号 目次

【トピックス】

医動物・種類同定検査のまとめ(平成 22 年 7~9 月分)	1
平成 22 年度 食品等の苦情品検査(4 月~9 月)	3
平成 22 年度 細菌性食中毒検査結果(4 月~9 月)	7
残留農薬検査(その 2)	8

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 平成 22 年 9 月	13
--------------------------------------	----



【情報提供】

衛生研究所 WEB ページ情報(平成 22 年 9 月分)	17
---	----

医動物・種類同定検査のまとめ

—平成 22 年 7～9 月分—



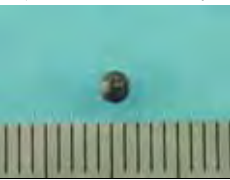
医動物担当では、各区福祉保健センター、各市場検査所、事業者などの依頼を受け、昆虫類を中心とした種類同定検査を行っています。昆虫類の種類を同定することによって、発生源、発生時期、人に対する害などが分かるため、効果的な対策を立てることにつながります。平成 22 年度 7 月から 9 月の種類同定検査件数は、14 件でした。依頼された 14 検体の内訳は昆虫類 11 件(ハチ目 4 件、チャタテムシ目 3 件、コウチュウ目 2 件、ハエ目 2 件)、その他 3 件でした。



相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
2 階の天井に虫が大量にいるのを発見した。	 有翅虫、黒色、約 9mm	ヤマアリ属の有翅虫*(雌成虫) (ハチ目) *翅の生えた成虫のこと	本属は地中に巣を作るものや、地表部に枯枝や枯葉を使った塚を作るものもいる。アリ類は決まった時期、無数の有翅虫(雌雄成虫)が結婚飛行のため巣から飛び立つ。種類によって結婚飛行の時期は異なる。飛行を終えた雌雄成虫は、灯火、窓際に多数飛来し、不快害虫となることが多い。
マンション(24F)で、キッチン(24F)の建具付近からアリが出てくる。	 働き蟻、黄褐色、約 2mm	ヒメアリの働き蟻 (ハチ目フタフシアリ亜科)	働き蟻の体長は約 1.5mm。人家周辺の石下や枯れ枝の芯に孔を開けて巣をつくる。わずかな隙間から屋内に入り、砂糖、菓子類、乾肉などを食害する。梅雨期になると、家の中の隙間を巣にすることもある。関東地方以南に分布する。
保育園 園庭の芝生付近で約 20 匹の虫が飛び回っている。	 雄成虫、黒色黄色の紋、約 18mm	ヒメハラナガツチバチ雄成虫 (ハチ目ツチバチ科)	雄成虫の体長は 11～19mm。雌成虫の体長は 15～22mm。コウチュウ目のマメコガネ属やスジコガネ属の幼虫に寄生する。本州、四国、九州に分布する。
リビングルームのテーブルでアリを発見した。	 働き蟻、褐色(頭胸部)、約 2mm	イエヒメアリの働き蟻 (ハチ目フタフシアリ亜科)	働き蟻の体長は 2～2.5mm。高断熱性の建築物などの家屋に発生が見られる。巣は壁や家具の下などの 1mm ほどの隙間につくられる。肉・魚・油脂などを好み食害する。
家屋内で発生した。	 成虫、褐色、約 1mm	ヒラタチャタテ (チャタテムシ目 コナチャタテ科)	体長 1.0～1.3mm。翅はなく、体は褐色。完全単為生殖のため雌のみが存在する。穀類や貯蔵加工食品、わら製品、ダンボール等広範囲のものを加害する。多湿を好み、カビを食べる。屋内に生息する最も普通の種。世界各地に分布する。


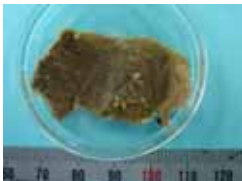

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
家屋内で発生した。	 成虫、褐色、約1mm	チャタテムシ類の一種 (チャタテムシ目)	体長0.5～10mmの小さな昆虫。多湿を好み、直射日光を避け、木や岩に生じた緑藻類や菌類を食べる。屋内に生息するものは木、竹、畳表などに生えるカビを食べる。 (別事例として、家具についていた虫もチャタテムシ類の一種であった。)
夕方、車のボンネットや車内に虫が現れる。	 成虫、黒色黄褐色帯あり、約3mm	ヒロオビジョウカイモドキ (コウチュウ目ジョウカイモドキ科)	体長は2.6～3.5mm。普通種で、本州から九州にかけて分布する。ジョウカイモドキ科は、成虫、幼虫ともに食肉性で、多くの種の成虫は花にきた小昆虫を捕食する。
家屋内で発生した。 (築1年)	 成虫、茶褐色、約3mm	コクヌストモドキ (コウチュウ目ゴミムシダマシ科)	成虫の体長は3～4mm。体色は赤褐色。穀粉害虫の中でも普通種で、小麦粉などの穀物をはじめ、菓子類、パン類など、多くの食品を食害する。明るい場所によく飛ぶ。近年、新築家屋内に本種が多数生息する事例がみられるが、その原因は不明である。日本各地に分布する。
玄関のインターホんにコバエが多数飛来する。	 成虫、黒色、約2mm	ナガサキニセケバエ (ハエ目ニセケバエ科)	体長2.5～3mm。ごみ溜めや糞、下水溝などの腐敗物から発生する。成虫の生存期間は2～5日と短い。雌成虫は、餌をとらず、羽化後24～30時間後には産卵を開始し、産卵すると間もなく死んでしまう。
調理場で発生した。	 幼虫、半透明、約5mm	ホシチョウバエの幼虫 (ハエ目チョウバエ科)	老熟幼虫の体長は約8mm。体は灰色がかった白色。浄化槽、汚泥の溜まった下水溝など有機物の多い水域に広く発生する。幼虫は日中も活動するが、深夜に最も活発に活動する。成虫も夜間に活発に活動する。成虫は5～10月にかけて出現する。広く日本に分布する。
網戸に白い物質が付着する。	 白色、約1～2mm	昆虫類の分泌物	 対照：樹木のロウ状付着物質、白色、絹糸状
バルコニーに動物の糞がみられる。	 黒色、約2～6mm	コウモリの糞	形態：らせん状(コウモリの糞の特徴) 糞の内部に多数の昆虫片が認められた。 (別事例として、2階屋根付近にみられた糞もコウモリの糞であった。)

平成22年度 食品等の苦情品検査(4月～9月)

平成22年度上半期に、区福祉保健センターに届けられた食品等に関する苦情品の中で、原因究明のために食品添加物室で実施した理化学検査は、28件、54検体(残留農薬関連を除く)でした。そのうち、主な検体の検査結果は次のとおりです。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
サラダ中の異物	給食でキャベツサラダを食べている最中に口の中で発見した。 	外観 鏡検 磁性 マイクロアナライザー結果	長さ14mm、太さ0.7mm、重さ49mg、銀色で針金状の金属物。 縦に走るスジ状模様を認めた。 わずかに磁性を認めた。 鉄、クロム、ニッケルの元素を認めた。 ステンレス製の金属と推定された。形態的には、参考品である保管用ザルの破損部位と類似していた。
きびなごフライ中の異物	給食できびなごフライを食べていたところ、中からプラスチック様の異物が出てきた。 	外観 鏡検 溶解性 赤外分光分析 結果	大きさ約5×8mmの半透明な薄片状の異物がセロテープに封入された状態で搬入された。セロテープから異物を取り出したところ、3個の破片になり、重さは合計で約2mgであった。 異物には所々に赤色と銀色の部分を認めた。また表面には細かなスジが多数あり、当所で入手したきびなごの主鰓蓋骨(しゅさいがいこつ)と形態的に類似していた。 塩酸を滴下したところ、発泡し溶解した。 骨と同様な赤外吸収スペクトルを認めた。また、灰化後のものは、骨を灰化したものと同様の赤外吸収スペクトルを認めた。 魚の骨と推定された。
肉まんの具から発見された異物	工場直売所で購入した肉まんを食べたところ、肉の中に丸い金属を発見し、口から出した。 	外観 鏡検 マイクロアナライザー結果	直径2.4mm、重さ80mg、黒銀色で球形の金属物。 表面に数ヶ所円形にくぼんでいる部分を認めた。 鉛およびアンチモンの元素を認めた。 鉛を主成分とする金属球と推定された。
カツ重	カツ重の肉を食べたところ、すっぱかった。	酢酸 プロピオン酸 n-酪酸 対照品との比較	280ppm 不検出 不検出 対照品は酢酸270ppm、プロピオン酸およびn-酪酸は不検出であり、差は認められなかった。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
金属異物 (給食)	給食の配膳時に、皿と皿のあいだに金属異物が挟まっていた。 	外観 鏡検 磁性 マイクロアナライザー 結果 備考	長さ15mm、直径0.7mm、重さ47mg、半円状に曲がった針金。 片方の先端はマイナスドライバー様の両側から斜めに切断された形状で、反対側は垂直に切断されていた。 磁性を認めなかった。 鉄、クロム、ニッケルを認めた。 ステンレス製の針金と推定された。 現場で使用している金属カゴを検査したところ、材質は異物と同じステンレスで太さも同じであったが目視では異物と合致する箇所が確認できなかった。
ゆでめん	購入したゆでめんを冷蔵庫で保管し、翌日開封したところ、腐敗臭がした。	官能検査 pH 酢酸 プロピオン酸 iso-酪酸 n-酪酸 対照品との比較 結果 備考	4名で行ったところ、異臭を認めた。 5.3 190ppm 不検出 不検出 不検出 対照品はpH5.1、酢酸150ppm、プロピオン酸、iso-酪酸およびn-酪酸はすべて不検出であった。また、GC/MS分析では対照品と比べて大きなピーク(3-ヒドロキシ-2-ブタノン)を検出した。 臭気成分は、3-ヒドロキシ-2-ブタノンと推定された。 3-ヒドロキシ-2-ブタノンはバター様の香りを持つ化合物であり、主に発酵食品に香気成分として含まれる。
ピーナッツ かりんとう上の の黒色異物	かりんとうに黒色の異物が付着しているのを発見した。 	外観 鏡検 溶解性 燃焼性 赤外分光分析 ヨウ素デンプン反応 フェノール硫酸反応(糖類の反応) 結果	大きさ9.7mm×5.3mm、重さ66mgの褐色の固まり。表面は凸凹しており、カッターで切断すると穴を多数認めた。 水およびエタノールに不溶であった。 加熱したところ、炭水化物を燃やしたような臭いを発した。 かりんとうの白色結晶部分(糖類)に類似した赤外吸収スペクトルを認めた。 陽性 陽性 原料の小麦粉や糖類が炭化して固まったものと推定された。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
ムキエビ	冷凍エビを購入し、1週間後に解凍した。エビチリにして喫食したが、チリソースの味が消されるほどのすっぱさ、苦さを感じた。	官能検査 揮発性塩基窒素 pH	特に異味異臭を認めなかった。 7.1Nmg% 9.7
寿司(いくら)中の異物	いくらを食べたところ、長さ2cmほどの硬いビニールのような異物が入っていた。 	外観 赤外分光分析 結果	大きさ25mm×10mm、厚さ0.10mm、重さ17mg、透明で四角形のフィルム状のプラスチック片。 ナイロンおよびポリエチレンと同様な赤外吸収スペクトルを認めた。 ナイロンおよびポリエチレンから成る樹脂と推定された。
ピーフメンチカツ中の異物	調理していたら紙状のものが入っていた。 	外観 鏡検 リグニン(木質素)反応 結果	大きさ43mm×25mm、厚さ0.5mm、重さ0.4gのこげ茶の紙様の異物。一部がメンチカツに埋もれた状態であった。なお、残品のメンチカツ3個からは異物は認めなかった。 異物を手で引きちぎったところ、断面に無色半透明な繊維の集まりを認めた。 陽性 紙の破片と推定された。
針金状の金属片異物(給食)	食パンの中に針金状の金属異物が混入していた。 	外観 鏡検 磁性 マイクロアナライザー 結果	長さ45mm×太さ0.9mm、重さ255mgの針金様異物と、長さ25mm×太さ0.9mm、重さ110mgの針金様異物。は食パンに埋まった状態であり、取り出すと中央がコイル状にねじれていた。はと同じ食パンの入った袋内に混入していた。 2個の異物とも全体に黒色で、所々剥げて銀色の部分が認められた。また、先端の片方は、鋭角に切断されていた。 2個の異物とも磁性を認めた。 2個の異物とも亜鉛および鉄の元素を認めた。 2個の異物とも亜鉛および鉄から成る針金片と推定された。対照品と形態および組成が類似していた。
豆腐	一口食べたところ漂白剤のような臭いがして舌がしびれた。	pH 亜硫酸 マグネシウム 備考	6.2 不検出 0.50mg/g 対照品を検査したところ、pH6.7、亜硫酸不検出、マグネシウム0.49mg/gであり、特に差がなかったため、原因は不明であった。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
こげ様黒色異物 (給食)		外観 鏡検 磁性 結果	大きさ2.5mm×0.6～1.0mm、重さ0.2mgの黒色のこげ様異物。食パンの表面に付着していた。 表面は凸凹した不定形で、多孔質の固まりを認めた。 磁性を認めなかった。 有機物の固まりと推定された。
メルルーサ (冷凍)に付着していた異物	メルルーサに異物が付着していた。 	外観 鏡検 赤外分光分析 結果	大きさ9.2mm×7.3mm、重さ29mg。 大きさ7.1mm×4.2mm、重さ14mg。くぼみのある白色不定形の2個の異物で、くぼみの部分に淡黄色～茶色の付着物を認めた。 表面は滑らかで、一方向に多数のスジを認めた。 骨(リン酸カルシウム)と類似した赤外吸収スペクトルを認めた。 骨と推定された。
中華まんじゅう(肉まん)中の異物	自宅で肉まんを喫食中に口の中で発見した。 	外観 鏡検 赤外分光分析 結果	大きさ2.6mm×1.8mm、重さ3mg。無色透明な不定形のガラス様の異物。 全体的に鋭くかけた角や擦りキズを認めた。 ガラスと同様の赤外吸収スペクトルを認めた。 ガラスの破片と推定された。
かつお胡麻味噌あえ中の異物 (給食)	揚げたかつおを喫食中に異物を発見した。 	外観 鏡検 赤外分光分析 結果	長さ13mm、太さ2.5mm、重さ50mgの無色透明な棒状の異物。 断面は円形で、表面には多数のキズがあり、片端は細かく裂けたような状態であった。 ポリアミド樹脂に類似した赤外吸収スペクトルを認めた。 ポリアミド製樹脂の破片と推定された。
ツナと野菜のスパゲッティ中異物 (給食)	給食で提供したツナと野菜のスパゲッティを喫食した際に皿の底から発見した。 	外観 磁性 マイクロアナライザー 結果	長さ約11mm、太さ0.5mm、重さ18mgのS字状の形をした針金状異物。先端は片方が斜めに両側から切断されたような形状で、反対側はちぎれたような形状であった。 磁性を認めなかった。 鉄、クロム、ニッケルを認めた。 ステンレス製の針金と推定された。

【検査研究課 食品添加物担当】

平成22年度 細菌性食中毒検査結果(4月～9月)

平成22年4月から9月までに食中毒およびその疑いで当所に検体が持ち込まれた66事例中、疫学的に食中毒と判定した事例は40事例でした。そのうち、病因物質(起因菌等)の確定した事例は27例(67.5%)でした。

なお、ここで挙げる事例数は、食中毒疑いとして検査依頼のあった事例のうち、患者便から食中毒菌が検出された数で、食中毒事件数とは異なります。

食中毒起因菌の第1位(事例数)は、カンピロバクターで11事例(40.7%)でした。昨年度9月までの9事例に比べわずかに増加でした。ついで、セレウス菌によるものが3件(セリウリド遺伝子保有株)(11.1%)でした。黄色ブドウ球菌によるものが2件(エンテロトキシンA、コアグララーゼIV型とエンテロトキシンA、コアグララーゼ型別不能)でした。サルモネラ(血清型はHader)および腸炎ビブリオが各1事例でした。その内訳を表に示しました。なお、他に感染症として依頼された腸管出血性大腸菌による事例は51事例でした。

カンピロバクター食中毒事例で分離された菌は、カンピロバクター・ジェジュニによるものが6事例でした。カンピロバクター食中毒の主な原因食品は鶏肉です。鶏の腸管にはカンピロバクターが常在しており、市販の鶏肉も高い割合で汚染されています。したがって鶏肉を生のまま、または加熱不足で食べたり、調理の際に二次汚染を起こしたりすることでカンピロバクター食中毒は発生します。

セレウス菌は環境中に存在し、この菌で汚染された食品を長時間保管すると毒素(エンテロトキシン、セリウリド)が産生され、それを食べることで食中毒を起こします。

黄色ブドウ球菌はヒトの表皮に常在しているために、食品を取り扱う人の手指によって食品が汚染され、その食品が長時間常温で保管されることで食品中にエンテロトキシンという毒素が産生され、その毒素を食べることによって食中毒が発生します。

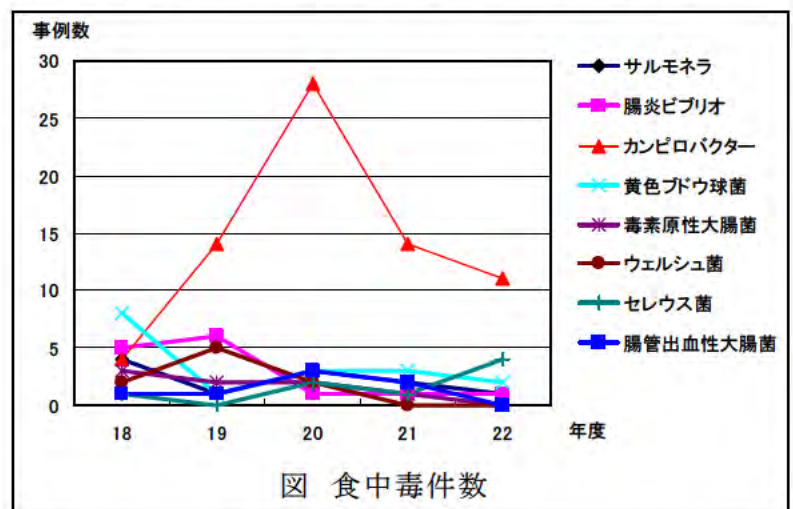
サルモネラ食中毒は、サルモネラ属菌が動物の腸管に常在しているため、加熱不足で肉を食べたり、調理の際に二次汚染を起こしたり、鶏卵を生食したりすることによって発生します。

なお、本年度の4月から9月までと平成18年度から21年度までの5年間の食中毒事例数を図に示しました。

表 起因菌別事例数(4～9月)

起因菌	事例数
カンピロバクター	11
セレウス菌	3
黄色ブドウ球菌	2
サルモネラ	1
腸炎ビブリオ	1
その他 *	9
不明	13
計	40

* 細菌性以外の事例



【検査研究課 細菌担当】

残留農薬検査(その2)

当所では、横浜市内に流通する農作物等の食品に残留する農薬の検査を行っています。平成22年度より農作物当たりの検査項目数を追加し、検査体制を一層強化しています。

今回は、平成22年6月から8月末の期間に食品専門監視班により搬入された農作物等の検査結果を報告します。

1 市内産農作物

6月に搬入されたきゅうり及びじゃがいも(各3検体)の計6検体、7月に搬入されたさやいんげん及びとうもろこし(各3検体)の計6検体、8月に搬入されたなす、なし及びぶどう(各2検体)の計6検体について検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、なし2検体及びぶどう2検体から農薬がそれぞれ検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

2 国内産農作物

6月に搬入されたアスパラガス3検体、7月に搬入されたブロッコリー、みず菜(各2検体)、キャベツ、グリーンカール、トマト及びレタス(各1検体)の計8検体、8月に搬入されたピーマン、すいか(各3検体)及びもも(2検体)の計8検体について検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、アスパラガス1検体、グリーンカール1検体、トマト1検体、レタス1検体、ピーマン1検体、すいか1検体及びもも2検体から農薬がそれぞれ検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

3 輸入農作物(冷凍食品を含む)

6月に搬入されたチコリ(2検体)、たまねぎ、トレビス、パプリカ及びポアロ(各1検体)の計6検体について残留農薬検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、パプリカ1検体及びポアロ1検体から農薬がそれぞれ検出されました。ただし、残留農薬の基準値を超えるものではありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

今回の検査で検出された農薬の概要については、11ページからの【農薬解説】を参考にしてください。

表1 残留農薬検査結果

(H22年6月～H22年8月末)

農作物	産地	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
市内産農作物						
きゅうり	横浜市	3	0			
じゃがいも	横浜市	3	0			
さやいんげん	横浜市	3	0			
とうもろこし	横浜市	3	0			
なす	横浜市	2	0			
なし	横浜市	2	1	{ クレソキシムメチル	0.20	5
				{ クロルフェナピル	0.02	1
				{ テブフェンピラド	0.14	0.5
				{ フェンプロパトリン	0.22	5
			1	{ クレソキシムメチル	0.02	5
				{ クロルフェナピル	0.02	1
				{ デルタメトリン及び	0.02	0.5
				{ トラロメトリン	0.16	5
				{ フェンプロパトリン	0.16	5
ぶどう	横浜市	2	1	{ アゾキシストロビン	0.14	10
				{ ペルメトリン	0.05	5.0
			1	{ アゾキシストロビン	0.02	10
				{ クレソキシムメチル	0.03	15
				{ クロルフェナピル	0.04	5
				{ ペルメトリン	0.10	5.0
				{ チアメトキサム	0.02	2
国内産農作物						
アスパラガス	国産	3	1	{ アセタミプリド	0.02	5
				{ クロチアニジン	0.01	0.7
ブロッコリー	国産	2	0			
みず菜	国産	2	0			
キャベツ	国産	1	0			
グリーンカーネル	国産	1	1	イミダクロプリド	0.05	5
トマト	国産	1	1	{ インドキサカルブ	0.02	0.5
				{ ボスカリド	0.15	5
レタス	国産	1	1	プロシミドン	0.04	5
ピーマン	国産	3	1	{ アセタミプリド	0.21	5
				{ クロルフェナピル	0.01	1
				{ メキシフェノジド	0.13	3
すいか	国産	3	1	プロシミドン	0.01	3
もも	国産	2	1	{ アセタミプリド	0.10	5
				{ アゾキシストロビン	0.02	1.5
				{ クロルピリホス	0.02	1.0
			1	チアクロプリド	0.04	1
輸入農作物						
チコリ	ベルギー	2	0			
たまねぎ	中国	1	0			
トレビス	アメリカ	1	0			
パプリカ	韓国	1	1	{ アクリナトリン	0.05	1
				{ クロルフェナピル	0.73	1
				{ テブフェンピラド	0.34	0.5
				{ プロシミドン	0.06	5
				{ ボスカリド	0.01	10
ポアロ	ニュージーランド	1	1	{ アラクロール	0.01	0.01
				{ トリアジメノール	0.09	0.2

表2 農薬の検査項目及び検出限界(114項目)

農薬名	検出限界 (ppm)	農薬名	検出限界 (ppm)	農薬名	検出限界 (ppm)
BHC (、 、 及び の和)	0.005	ジコホール	0.01	フェニトロチオン	0.01
DDT (DDE、DDD 及び DDT の和)	0.005	シハロトリン	0.01	フェンクロルホス	0.01
EPN	0.01	シフルトリン	0.01	フェンスルホチオン	0.01
アクリナトリン	0.01	シペルメトリン	0.01	フェンチオン	0.01
アセタミプリド	0.01	ジメチルピホス	0.01	フェントエート	0.01
アゾキシストロピン	0.01	ジメエート	0.01	フェンバレレート	0.01
アラクロール	0.01	シメトリン	0.01	フェンピロキシメート	0.01
アルドリン及びディルドリン	0.005	スルプロホス	0.01	フェンプロパトリン	0.01
イソフェンホス	0.01	ダイアジノン	0.01	ブタクロール	0.01
イソプロカルブ	0.01	チアクロプリド	0.01	ブタミホス	0.01
イプロベンホス	0.01	チアメトキサム	0.01	ブプロフェジン	0.01
イミダクロプリド	0.01	チオベンカルブ	0.01	フルジオキシソニル	0.01
インドキサカルブ	0.01	チフルザミド	0.01	フルシトリネート	0.01
エスプロカルブ	0.01	テトラクロルピホス	0.01	フルトラニル	0.01
エチオン	0.01	テトラコナゾール	0.01	フルバリネート	0.01
エトプロホス	0.005	テトラジホン	0.01	プロシミドン	0.01
エトリムホス	0.01	テブコナゾール	0.01	プロチオホス	0.01
エンドスルファン (及び の和)	0.005	テブフェノジド	0.01	プロパホス	0.01
エンドリン	0.005	テブフェンピラド	0.01	プロピザミド	0.01
オキサミル	0.01	テフルトリン	0.01	プロメカルブ	0.01
カズサホス	0.01	テフルベンズロン	0.01	プロモプロピレート	0.01
カフェンストロール	0.01	デルタメトリン及び トラロメトリン	0.01	ヘキサコナゾール	0.01
カルバリル	0.01	テルブホス	0.005	ヘキサフルムロン	0.01
クレソキシムメチル	0.01	トリアジメノール	0.01	ヘブタクロル (エポキシドを含む)	0.005
クロチアニジン	0.01	トリアジメホン	0.01	ペルメトリン	0.01
クロマフェノジド	0.01	トルクロホスメチル	0.01	ペンコナゾール	0.01
クロルピホス	0.01	パラチオン	0.01	ホサロン	0.01
クロルピホスメチル	0.01	パラチオンメチル	0.01	ボスカリド	0.01
クロルフェナビル	0.01	ハルフェンブロックス	0.01	マラチオン	0.01
クロルフェンソン	0.01	ピフェントリン	0.01	マイクロブタニル	0.01
クロルフェンピンホス	0.01	ピペロホス	0.01	メチダチオン	0.01
クロルプロファミ	0.01	ピラクロストロピン	0.01	メキシフェノジド	0.01
クロロクスロン	0.01	ピリダフェンチオン	0.01	メタクロール	0.01
シアノフェンホス	0.01	ピリプチカルブ	0.01	メトリブジン	0.01
シアノホス	0.01	ピリプロキシフェン	0.01	メピンホス	0.01
ジオキサベンゾホス	0.01	ピリミノバックメチル	0.01	リニユロン	0.01
ジクロフェンチオン	0.01	ピリミホスメチル	0.01	リンデン(-BHC)	0.002
ジクロラン	0.01	フェナリモル	0.01	ルフェヌロン	0.01

DDTはp,p'-DDE、p,p'-DDD、o,p'-DDT及びp,p'-DDTの和

【農薬解説】

アクリナトリン

『アーデント』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤で、鱗翅目などの害虫やダニ類に効果があります。

アセタミプリド

『モスピラン』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。広く使用されている有機リン系農薬などに対して効きにくくなった多くの害虫に対しても効果があります。

平成22年度に実施した検査において、キャベツ、チンゲンサイ及びトマトから検出された農薬です。

アゾキシストロピン

『アミスター』などの商品名で一般的に販売されている殺菌剤で、多くの菌類に対し強い抗菌効果があります。

平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬です。

アラクロール

『ラッソー』などの商品名で一般的に販売されている除草剤で、一年生雑草(特にイネ科雑草)に高い効果があります。

平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬です。

イミダクロプリド

『アドマイヤー』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤で、即効的な殺虫効果があります。

平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬で、平成22年4～5月に実施した検査において、ほうれんそうから検出された農薬です。

インドキサカルブ

『トルネード』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤で、果樹や野菜等に発生する鱗翅目害虫に効果があります。

平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬です。

クレソキシムメチル

『ストロビー』などの商品名で一般的に販売されている殺菌剤です。特にうどんこ病、黒星病、べと病などに対して効果があるとされています。

クロチアニジン

『ダントツ』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。半翅目害虫やアザミウマ目害虫などの各種害虫に高い殺虫効果がある一方で、蚕やミツパチなどに影響を及ぼす恐れがあることも知られています。

平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬です。

クロルピリホス

『ダズバン』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。果樹害虫防除用の薬剤で、特にハマキムシ類に効果があり、速効性と残効性があります。

クロルフェナピル

『コテツ』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。多くの野菜に適用があり、従来の殺虫剤に耐性がある害虫に対しても効果があります。

4～5月に実施した検査において、キャベツから検出された農薬です。

チアクロプリド

『バリアード』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。吸汁昆虫や咀嚼昆虫に効果があり、ミツバチなどに対しては影響が少ないとされる薬剤です。

チアトキサム

『ビートルコップ』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤で、半翅目や鱗翅目等の広範囲な害虫に効果があります。

テブフェンピラド

『ピラニカ』などの商品名で一般的に販売されている殺ダニ剤です。ハダニ類の生育における全ての段階で効果があります。

デルタメトリン及びトラロメトリン

トラロメトリンは『スカウト』などの商品名で一般的に販売されています。一方、デルタメトリンは農薬登録されていません。しかし、トラロメトリンの一部が分解してデルタメトリンになるため、併せて評価していません。

トリアジメノール

『バイタン』などの商品名で知られている殺菌剤ですが、日本では未登録の農薬です。果樹や野菜等のうどんこ病、さび病、赤星病などの防除に効果があります。

フェンプロパトリン

『ロディー』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。広範囲の害虫(特にハダニ類)に対して有効的に作用する農薬です。

プロシミドン

『スミレックス』などの商品名で一般的に販売されている殺菌剤です。野菜や豆類の菌核病や灰色かび病、ももやおとうもの灰星病などに効果があります。

ペルメトリン

『アディオン』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。茶、果樹、野菜などの主要害虫の防除に使用される農薬です。

ボスカリド

『カンタス』などの商品名で一般的に販売されている殺菌剤です。各作物の灰色かび病や菌核病に対して高い効果があり、残効性や耐雨性もあります。

平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬で、4~5月に実施した検査において、トマトから検出された農薬です。

メトキシフェノジド

『ランナー』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。種々の鱗翅目害虫に対して異常脱皮を促すことによって殺虫効果を示す農薬です。

参考文献

- ・社団法人日本植物防疫協会，農薬ハンドブック2001年版
- ・農薬残留分析法研究班，最新農薬の残留分析法(改訂版)
- ・各農薬製造会社H.P.

【検査研究課 微量汚染物担当】

感染症発生動向調査委員会報告 9月

《今月のトピックス》

- レジオネラの届出が4件ありました。1月からの報告数は22件で、昨年の報告数16件をすでに超えています。
- 腸管出血性大腸菌感染症の届出が11件ありました。
- 夏季に流行が見られた、手足口病、ヘルパンギーナ、水痘、伝染性紅斑については、ピークも過ぎ、落ち着いています。

全数把握疾患

平成22年8月23日から平成22年9月26日まで(平成22年第34週から第38週まで。ただし、性感染症については平成22年8月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

<細菌性赤痢>

9月の届出数は、30日現在で2件です。渡航地はスリランカとミャンマーでした。

平成22年の届出は6件で、そのうち5件がアジアでの感染です。全国でも感染者の約8割はアジアでの感染と見られています。

細菌性赤痢については、国立感染症情報センターHPをご覧ください。

<http://idsc.nih.gov/iasr/30/358/tpc358-j.html>

平成22年 週一月日対照表

第34週	8月23～29日
第35週	8月30～9月5日
第36週	9月6～12日
第37週	9月13～19日
第38週	9月20～26日

<パラチフス>

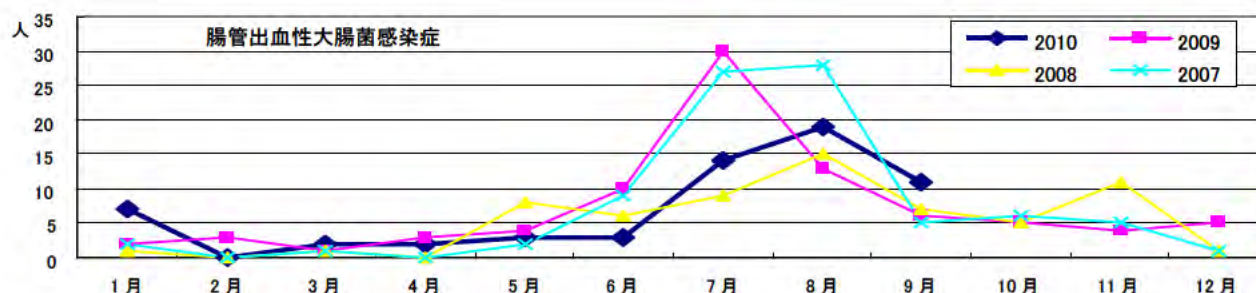
9月の届出数は、30日現在で1件です。渡航地はインドでした。

<腸チフス>

9月の届出数は2件です。家族例(母子)で、母には渡航歴がありました。

<腸管出血性大腸菌感染症>

9月の届出数は、30日現在で11件です。例年夏に多く見られる疾患ですが、冬季も発生が認められますので、季節にかかわらず、肉の十分な加熱を心がける必要があります。



啓発用チラシ「O157に注意しましょう」も併せてご利用ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>

<レジオネラ症>

9月は30日現在で4件の届出がありました。1月からの報告数は22件となり、既に昨年総報告数より増加しています。2007年より市内では増加傾向にあります(表参照)。レジオネラは、市中肺炎の起因为として重要ですが、過去に、ジャグジーや入浴施設、冷却塔等での集団感染も報告されています。診断された際には、浴槽の種類や温泉、銭湯等の利用状況等を確認する事も重要です。

レジオネラ症の報告数の推移(2001年～2010年9月)

2010年は9月まで

年	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
全国	86	167	147	160	281	518	668	886	712	527
横浜市	0	3	2	1	8	7	28	32	16	22

全国のレジオネラ症の報告の傾向は <http://idsc.nih.go.jp/iasr/29/346/tpc346-j.html> をご覧ください。

<梅毒>

9月は30日現在で3件の届出がありました。

<麻しん>

1件の届出がありました。インドからの輸入例と思われます。

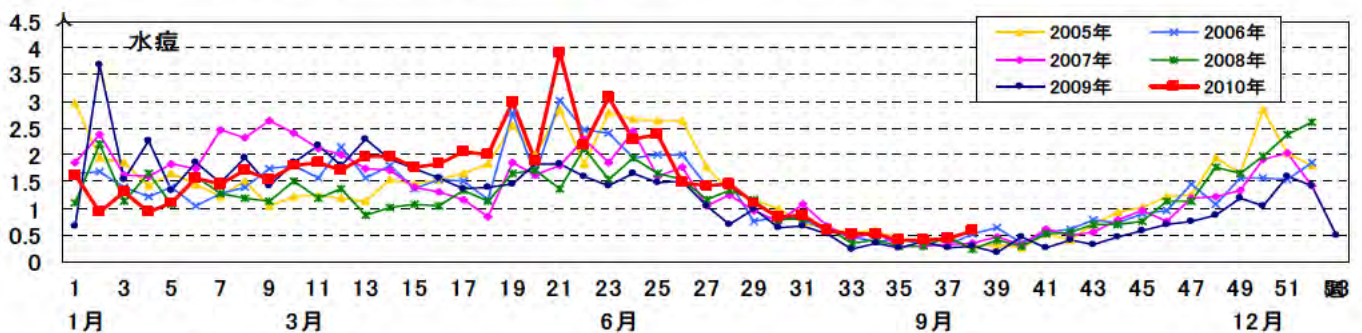
定点把握疾患

1 患者定点からの情報

市内の患者定点は、小児科定点:91か所、内科定点:59か所、眼科定点:18か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計197か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計150定点から報告されます。

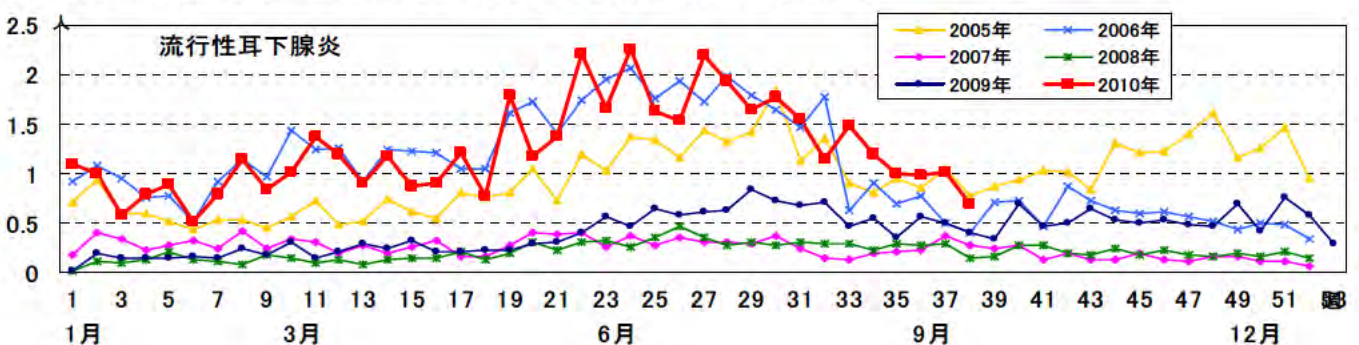
<水痘>

第38週では定点医療機関からの届け出あたり(以下定点あたりとする)0.59です。神奈川県域(横浜、川崎、相模原を除く。以下県域)では0.29、全国0.51といずれも報告数は少ないですが、例年冬にかけて徐々に報告数が徐々に増えていきますので、今後の動向に注意が必要です。



<流行性耳下腺炎>

第38週では定点あたり0.70です。県域0.79、川崎市0.61、東京都0.36、全国0.97でした。例年夏季を中心に流行が見られますが、過去5年と比較しても高めに推移しています。



<インフルエンザ>

第38週では定点あたり0.03です。県域0.03、川崎市0.07、東京都0.07、全国0.04でした。病原体定点等からの検査では、A香港型が4件PCR等で確認されています。

<性感染症>

性感染症は、診療科でみると産婦人科系の10定点、および泌尿器科・皮膚科系の17定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

8月は、性器クラミジア感染症の報告数は男性21件、女性18件でした。性器ヘルペス感染症は、男性4件、女性9件です。尖圭コンジローマは男性11件、女性4件、淋菌感染症は男性16件、女性2件でした。

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときにのみ行っています。

<ウイルス検査>

9月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点41件(鼻咽頭ぬぐい液37件、ふん便3件、その他1)、内科定点2件(鼻咽頭ぬぐい液)、眼科定点3件(結膜ぬぐい液)、基幹定点6件(鼻咽頭ぬぐい液4件、髄液2件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎25人、耳下腺炎4人、胃腸炎4人、発疹症3人、インフルエンザ1人、ヘルパンギーナ1人、手足口病1人、紅斑1人、発熱1人、内科定点はインフルエンザ2人、眼科定点は流行性角結膜炎3人、基幹定点はウイルス性髄膜炎3人、下痢・発熱1人、インフルエンザ1人、インフルエンザ疑い1人でした。

10月12日現在、小児科定点の気道炎患者2人とヘルパンギーナ患者1人からコクサッキーウイルスB(CB)4型、気道炎患者2人からアデノウイルス(型未同定)、耳下腺炎患者1人からムンプスウイルス、インフルエンザ患者1人からインフルエンザウイルスAH3型、内科定点のインフルエンザ患者2人からインフルエンザウイルスAH3型、基幹定点のインフルエンザ患者からインフルエンザウイルスAH3型が分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点の気道炎患者3人からエンテロウイルス68型、気道炎患者1人と胃腸炎患者1人からアデノウイルス(型未同定)、気道炎患者1人と発熱患者1人からライノウイルス、気道炎患者1人からCB4型ウイルス、手足口病患者1人からCA6型ウイルス、紅斑患者1人からヒトパルボウイルスB19型、発疹症患者1人からヒトヘルペスウイルス6型、胃腸炎患者1人からノロウイルスウイルスG2型、基幹定点のウイルス性髄膜炎患者1人からCB2型、インフルエンザ疑い患者1人からエンテロウイルス68型の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

【検査研究課 ウイルス担当】

<細菌検査>

9月の感染性胃腸炎関係の受付は小児科定点からの検体が2件で1件から *Campylobacter jejuni* が検出されました。

基幹定点からは菌株受付が5件、定点以外の医療機関からは菌株が11件でした。そのうち、基幹定点から、腸管毒素原性大腸菌O6:H16、LT、ST産生が1件検出されました。また、パラチフスA菌および赤痢菌 (*S. flexneri*) が各1件検出されました。

定点以外の医療機関からは腸管出血性大腸菌O157、VT1 & 2が6件、O157、VT2が1件、O26、VT1が1件検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は小児科定点からの7件で、A群溶血性レンサ球菌が3件から検出されました。その血清型はT28が2件、T1およびTB3264が各1件から検出されました。

表 感染症発生動向調査による病原体検査(9月) 細菌検査

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	9月			2010年1~9月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
赤痢菌		1	1		3	3
腸管病原性大腸菌					6	
腸管出血性大腸菌			8		3	47
腸管毒素原性大腸菌		1		1	3	
チフス菌			1			1
パラチフスA菌		1			1	1
サルモネラ				2		
カンピロバクター	1			1		
不検出	1	2	1	13	53	1

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	9月			2010年1~9月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌						
T1	1			25	1	1
T4				3		
T6				1		
T12				5		
T13				1		1
T25				1		
T28	2			9		
T B3264	1			2		
型別不能				3		
G群溶血性レンサ球菌				1		
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌					2	
バンコマイシン耐性腸球菌						3
髄膜炎菌						1
Streptococcus suis						1
Corynebacterium ulcerans					1	
不検出	3			23		10

* 定点以外医療機関(届出疾病の検査依頼)

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【検査研究課 細菌担当】

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 平成22年8月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 平成22年9月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

今回は、平成22年8月のアクセス件数、アクセス順位及び平成22年9月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については総務局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (平成22年8月)

平成22年8月の総アクセス数は、187,430件でした。主な内訳は、感染症56.8%、食品衛生15.4%、保健情報13.4%、検査情報月報5.0%、生活環境衛生2.0%、薬事1.2%でした。

(2) アクセス順位 (平成22年8月)

8月のアクセス順位(表1)は、第1位が「サルモネラ感染症(食中毒)について」、第2位が「マイコプラズマ肺炎について」、第3位が「緊急健康情報 熱中症」でした。

第1位の「サルモネラ感染症(食中毒)について」は、米国での鶏卵によるサルモネラ食中毒に関する報道^{*}による、アクセス数の増加と考えられます。

サルモネラ菌は一般に、汚染された家禽、鶏肉、卵、水から感染し、人間の腸管に影響を及ぼし、感染すると通常8時間～48時間以内に下痢、発熱、腹部のけいれんなどの症状が現れます。

しかし、最近の Enteritidis 感染では3～4日後の発病も珍しくない場合もあります。

健康な成人ではその症状が胃腸炎にとどまりますが、小児では意識障害、けいれんおよび菌血症、高齢者では急性脱水症および菌血症を起こすなど重症化しやすく、回復も遅れる傾向があります。

^{*}米国中西部アイオワ州で生産された卵がサルモネラ菌に汚染され、少なくとも数百人の食中毒を引き起こした疑いが強まり、同州の卵生産会社が、全米に出荷した約3億8千万個の卵の自主回収を行いました。

・FDA(米国食品医薬品局)によると、問題の卵はアイオワ州北部の5か所の農場で生産された。

・カリフォルニア、コロラド、ミネソタの各州で食中毒を発症した計270人は、この卵が原因とみられている。

・米国内では5月から7月までに、平年よりも1,300件多い約2,000件の食中毒が報告された。

< 参考 >

食品安全情報(微生物) 国立医薬品食品衛生研究所 安全情報部

<http://www.nihs.go.jp/hse/food-info/foodinfonews/2010/foodinfo201018m.pdf>

<http://www.nihs.go.jp/hse/food-info/foodinfonews/2010/foodinfo201019m.pdf> (2010年9月3日更新)

<http://www.nihs.go.jp/hse/food-info/foodinfonews/2010/foodinfo201020m.pdf> (2010年9月20日情報)

表1 平成22年8月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	サルモネラ感染症(食中毒)について	14,139
2	マイコプラズマ肺炎について	5,601
3	緊急健康情報 熱中症	4,351
4	衛生研究所トップページ	3,522
5	百日咳について	2,733
6	サイトメガロウイルス感染症について	2,535
7	熱中症(熱射病、日射病)を予防しましょう	2,407
8	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	2,252
9	大麻(マリファナ)について	2,039
10	梅毒について	2,033

データ提供:総務局IT活用推進課

第2位は「マイコプラズマ肺炎について」でした。

国立感染症情報センターの報告によりますと、第30～34週(7/26～8/29)における、マイコプラズマ肺炎の定点あたりの報告数は、減少していましたが、第35週(8/30～9/5)では、定点あたりの報告数は増加し、過去5年間の同時期と比較すると、2006年、2008年について、多い値で推移しています。

第3位は「緊急健康情報 熱中症」でした。

今年の夏は梅雨明け以降、全国的に厳しい暑さが続き、7月に入り、熱中症による救急搬送が急増しました。このため、7月23日から横浜市および衛生研究所のトップページに、熱中症についての緊急情報を掲載しました。8月に入っても、救急搬送数は増加傾向にあり、アクセス数が増加したものと考えられます。

関連情報として、第7位に「熱中症(熱射病、日射病)を予防しましょう」が入りました。

(3) 電子メールによる問い合わせ (平成22年9月)

平成22年9月の問い合わせの件数は、6件でした(表2)。

表2 平成22年9月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
かびの検査について	1	感染症・疫学情報課 (理化学部門と合議)
井戸水の水質検査について	1	検査研究課 水質担当
医療機関の方針について	1	感染症・疫学情報課
ホームページの記載について	1	検査研究課 食品添加物担当
アシネトバクター感染症について	1	感染症・疫学情報課
肺炎球菌ワクチンについて	1	感染症・疫学情報課

2 追加・更新記事 (平成22年9月)

平成22年9月に追加・更新した主な記事は、4件でした(表3)。

表3 平成22年9月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
9月9日	感染症に気をつけよう (9月号)	追加
9月9日	デング熱・デング出血熱について	追加
9月9日	高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)の発生状況	更新
9月27日	感染症Q&A薬剤耐性菌編(その2)〔感染症に気をつけよう9月臨時号〕	更新

【 感染症・疫学情報課 】